
呪われてる王子様

眠井

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪われてる王子様

【Nコード】

N8072Y

【作者名】

眠井

【あらすじ】

呪われてる王子様と呪いを解こうと奮闘する歌えない吟遊詩人の話。
ハートフルボツコメディ目指してます。

奴隷、元奴隷になる。

私が見たものを表現するのは、少し難しい。

王城の東側に位置する王子の私室は、広いのに驚くほど殺風景だった。

数少ない家具も元は上等なものようだが、今では無数の傷がつき、見る影も無い。

殺伐としたこの部屋は、持ち主の心象風景そのままなのだろう。敷物すらない床を眺めれば、まるで獣が暴れたようなひび割れだらけだ。

しかし他も部屋も廊下もきちんと整備されていたし、ここの部屋だって、別に地下牢でも監禁部屋でもないのに。

目の前で長々と話し続けていた声が止まった。

肩を押され前へ押し出される。

「海を越え、遙か彼方からやって来たと自称しておりますので、殿下の無聊を慰めるのに少しは役には立つでしょう」

面倒で下げていた頭を更に低くし、うやうやしく口上を述べる。

「こちら辺は、飯の種なので手馴れたものだ。

「私は各国を巡りまして、様々なものを見聞しております。このよ
うな声ではありますが、様々な物語を存じておりますし」

大事に抱えていたリュートを少し鳴らす。

「歌や踊りに相応しい音楽を数多く学んでおりますので、お楽しみ

いただけるかと」

返事の代わりに重い溜息。

浅い、せわしない呼吸音が気になり、顔を上げる。

王子、と呼ばれているだけあり、着ている布地は上等なものだ。

黒と灰を基調としている・・・若い男にしては老熟した服装だと思いが。

目許は落ち窪み、頬はこけ、顔色は服の色とあいまって黒っぽい。あまり具合が良くなさそうだが、何の病だろうか。

答えはすぐに出た。

服から形が浮く足がどう見ても尋常の太さではない。細すぎる。

以前、居た隣国で聞いた噂話が信憑性を帯びてきた。

この国の王子は、魔女に呪われ、怪物のような姿をしている。

王子の成人祝いの席で、招待された魔女を怒らせ公衆の面前で呪われた姿にされ、王は国中どころか近隣の学者、賢者、魔女の類を呼び寄せ、呪いを解いたものに莫大な褒賞をとらすと触れを出したが、呪いは解けず、それどころか新しい試みをする度に呪いの種類はかわり、呪いは今でも王子の身を苛んでいる　と。

事実だったようだ。

ところで、私を連れてきた大臣は、骸骨のような、いかにも演劇に出てきそうな悪役的風貌をしている。

ちなみに大臣の奥方は、往年は大変な美女であった事を思わせる風貌だったので、ギャップが激しい。

にもかかわらず、大臣は思わせぶりの台詞も言わず、胡乱な返事をする王子をよそに、私にすっかりやれといいつけ部屋を出てしまった。

何の含みもなく事務的な話しかなかった。

まったく、古典的なほど演出的容貌に優れているのに
なんとということでしょう。

コレでは面白い話にならないではありませんか。

とはいえ、この国は大陸の大半を配下に収めている帝国の配下にあるような小国。

城もそれほど大きくなく、地方領主といってもいいくらいだ。

そんな野心があれば、とっくに他の国へ行っているのかもしれない。

あれこれと思索していると、王子から声が掛かった。

「もう用は無いから、帰っていいぞ」

「どこへ？」

王子は、喋るのも億劫という様相。

慌てて椅子を引っ張ってきて勧めると、崩れるように座り込んでしまった。

大臣の前なので、見栄を張っていたのか。

辛そうに呼吸をしている王子を見ているのも忍びなくて、リュートの弦を指の腹で撫でる。

攫われて数年、奴隷として過ごして故郷に文を送った事もあったけど、なんの応答も無く望みは潰えた。

毎日の稼ぎが足らなくて殴られる日の方が多くなってきたから、もうすぐこれも取り上げられる事になっていて

あの時、あの街角で大臣の馬車の車軸が外れなければ・・・

「私は大臣様にお買い上げいただき、王子様のお傍に仕えるよう申し付けられておりますが」

王子は一瞬瞑目し、息を吐く。

「この国は奴隷制度を廃止している。よってお前は今から自由の身だ。家に帰るといい」

王子の瞳の色は黄色い。

見世物として檻の中で諦めたように蹲っていた狼の瞳と同じ色。髪は白と灰色が入り混じった不思議な色合いをしていて、肌は少し白味が多い。

きつとずっと部屋の中にいるからだろう。

あの狼は、二日後死んだ。

「そうおっしゃいましても」

今着ている服だって、大臣、というか奥方と侍女が見かねて用意してくれたものだ。

「大臣様のご好意もありますので、いかがでしょう。数ヶ月、いえ、数週間お傍で仕えさせていただきませんか？」

私にも見栄があるから、銅貨の三枚しか持っていないとは言えな

い。

ここで追い出されても右も左もわからないこんな山奥の小国では、日銭を稼ぐのも一苦労だ。

奴隷のままなら、一応衣食住は保障されていたのだけど。

「わかった。そうしよう」

大臣の機嫌を損ねるのは問題だと王子も気がついたらしく、あっさり許可が出る。

確かに安くはない金を払って娯楽を提供されたのに、いきなり台無しでは善意も台無しだ。

王子はとても疲れている様子なので、私はお茶をもらってきまます
と行って外へ出た。

奴隸、元奴隸になる。(後書き)

お読み頂きありがとうございます。こんな感じで淡々と行く予定ですのでよろしくお願いします。

歌えない吟遊詩人

部屋の外でうろろろしていると、女中らしい淡い色のエプロンドレスの少女を見つけた。

軽く自己紹介をして、調理場までの案内を乞う。

幸い、まだ忙しい時間帯ではないらしく微かに話し声が聞こえた。小間使いに礼を述べ、声を掛けてから中に入る。

恰幅の良い中年男性は、理長だろうか、それから同年代くらいの女性、幼い子供が二人。

おそらく火番か、雑用係だろう。

眼を丸くしている四人に軽く挨拶と自己紹介をしてから用件を述べる。

「王子にお茶と、何か食べ物をもって行きたいのですが」

「王子に!？」

がたんと椅子を鳴らして、女性が叫ぶ。

ちょっと、びっくりした。

長々と調理場で拘束されてから部屋に戻ると、王子は疲れた様子で椅子に腰掛けていた。

隣には侍女が立ち、お茶の準備をしている。

なんか、部屋が豪華になっていますよ？

どこから持ってきたのか、あの殺風景だった部屋には花が飾られ、更に洒落たテーブルと椅子、ソファークッションも絨毯も完備されている。

さすがに壁にはまだ何も無いけど・・・。

圧倒されつつ、両手に持っていた盆をそつと下ろす。

これでもかと盛られた果物と甘そうなお菓子、焼きたてのものもある。

お茶を優しげな顔をした侍女が、嬉しそうな顔をして私にも勧めてきた。

良いのだろうか和王子を見ると、椅子を示してくれたのでありがたく腰掛けいただく。

この準備をする為に調理場で長く待たされていたのかと納得。

侍女は、物凄くいい笑顔で食べ物王子と私に取り分けてくれた。

予想以上の高待遇・・・あ、いや、もしや毒見では無いだろうかと思いつつ、湯気を立てている平たいパンを二人の顔を確認してから食べる。

ふわふわして、美味しい。

網目状に焼かれている丸い菓子は、表面がさくつとして中は甘い。

干し葡萄に、・・・細かい袋状の赤い果物。

売られているのは見たことがあるけど、食べるのははじめてた。人心地ついた所で、王子を見るとじつとこちらを見ていた。

・・・やはり、毒見だったのかと思いなから、残り僅かになった果物を飲み下す。

「どうだ？」

「どれも物凄く美味しいです！」

予想以上に語尾を強調してしまった。

笑みをこぼす二人に羞恥を覚え、顔を俯かす。

「蜂蜜をかけると、もっと美味しいですよ」

そう侍女は言つと、私の皿に平たいパンを追加し、王子と私の皿のものに蜂蜜を掛けた。

さすが王宮だ。蜂蜜も透き通っていて、高級品である事が伺える。甘さで口がとろけそうだ。

「王子、凄く美味しいです食べなくては損です！毒は入っていません！」

つい余計な事まで言ってしまったけど、口の端が緩んで仕方ない。

こんな美味しい食べ物は何れ位ぶりだろう。淹れたてのお茶のなんて香りの高いことか。

王子は手元の皿を眺め、手をつける様子がない・・・なんということでしょう。

「さめたら美味しさ半減ですよ？さあ、どうぞ！」

そういつて、私はフォークを差し出した。

王子より先に食べる方が失礼だと気がつくのは、その少しあとの事である。

空っぽのお皿を片付けるのを手伝い、侍女と調理場まで行くと色々な人から背中や肩を叩かれた。

今までこんなに歓迎された事があつただろうか。否ない。

こんな大勢から一度に親切にされるなんて・・・後で悪い事でもあるのではと思つてしまい、自分を戒める。

部屋を案内され着替えなど用意してもらい、ついでに細々とした説明をつける。

日の当たるいい部屋だそうなのでありがたい。

当然ながらベットと机だけの小さな部屋だが居心地は良さそうだ。リユートを置き、周囲を見回すと日用品と数枚の服、それに一輪の花が飾られていた。

淡い黄色の花の心遣いに、胸が熱くなる。

王子は呪われて以来、滅多に部屋から出てこない。

料理長達の話によれば、以前の王子は親子関係は良好、学友である騎士達とも仲がよく、社交的で、国民にも慕われる人物だったそう、呪いを受けてから、人の目を恐れすっかり引きこもり、呪いをとく為にさまざま・・・奇妙な薬や液体を飲むとか、をした結果、食事も喉に通らなくなつてしまつたらしい。

奇妙な液体や薬に関しては、注文を受けた副料理長がげんなりとした表情で教えてくれたのだが、あまり語りたくは無。

体が不要と判断したから出したものを取り込む理由が思いつかない、とだけ言つておこう。

特にここ何ヶ月は殆ど食事をとらなくなっていたそうで、だから料理人達はああいう対応だった、らしい。

私は確かに王子の良い憂さ晴らしになったようだ。

夕食の刻限までふらふらと城の中を歩き回り、場所の把握に努める。

あまり大きな城ではないので、注意していれば、初めてでも迷う事はない。

地味で質素、だが手入れは行き届いているので居心地がいい。

使用人達の顔も卑屈な感じはしないので、治世がいいのだろう。

ほどほどで切り上げるべきだと判断し、リユートの位置を微調整しながら廊下を歩いてみると、前からお仕着せ姿の若い男性が物凄い勢いで歩いてきた。

背、高いなあ・・・目が合った。

「あッ楽士！」

カツカツと勢いよく詰め寄られ内心少し、引く。

黒を基調としたお仕着せに浅黒い肌に短い濃茶の髪が剣山のごとく突き立っているの、あまり勢いよく来られると軍馬に寄られるみたいだ。

「なんでしょうか、えー・・・」

「クラウディオ王子の従者を務めるアダンだ。王子に関することから何でも俺に訊け！訊いて下さい。むしろ俺が訊ねたい。どうやっ

て王子に食事摂らせたんだ!？」

両手を掴まれ勢いよく上下に振られ困惑する。

「そんな大層な事じゃなくて、お茶頂いて私と一緒にお菓子を食べてだけで・・・」

「なんだつまらん」

いきなり手を離され、バランスを崩してよろめくと、襟首を掴まれた。

「ドジだなあ、お前」

なんだろう、この気持ち。

「楽士、お前もちゃんと食べてるのか？よし、一緒に食べに行くか」

勝手に自己完結しましたよこの人。

小動物のように襟首を掴まれずる引つ張られる私を、通り過ぎる使用人達は生暖かな眼差しで見守っていた。

見てないで、助けて。

従者アダン

結局、あのあとほぼ一晩中、従者アダンによる王子自慢され、情報収集の代償に睡眠を削られふらふらしながら水場に行くと、あの優しい笑顔の侍女が心配してくれた。

彼女の名前は、ベル。

穏やかな性格で、あまり口数は多くないようだ。

と思うのは、アダンさんの口数が多すぎるせいだろう。

比較対象、間違えた。

「悪い人じゃないんだけど、ちょっと暴走するのよね」

そういつて笑う。

私も曖昧に返し、城門の方から現れた騎馬姿に眼を凝らした。

朝の警邏だろうか。

泥だらけの馬と泥だらけの兵士が最後尾についている。

馬は暴れ足りないのか、手綱を持っている方は振り回されて大変そうだ。

なんとなく、連想が繋がる。

「なんか、馬みたいですね」

「ホント、馬並みのよね」

顔を赤らめて言われても、困るんですけど。

美味しい朝食を食べ城内を散策していると、例によってアダンさんに遭遇し、今度は王子の部屋まで連れて行かれた。

執務中に大人しい曲でも奏でているという事らしい。

机に書類を載せ黙々と仕事をしている王子を邪魔しないよう、端っこに椅子を寄せ、『白い犬とワルツ』という曲を爪弾く。

王子の横に立ち、書類に関してあれこれ説明している事務官らしき男性・・・名前は後で聞いておこう、が軽く頷いたのでそのまま続ける。

激しい曲ではないから、邪魔にはならないだろう。

最後の調べが終わり顔を上げると、人が増えていた。

みなさん方、お茶を片手にお菓子を食べている。

「次はもっと華やかな曲がいいな。『黄色いネズミ』とか」

一時期流行した子供受けする曲を上げるアダンさんに、ベルさんがそれなら『風谷の姫君』がいいと異議を唱える。

事務官は机の上を片付けながら、『最後の夢』を聴きたいと控えめに主張。

王子は面白そうにこちらを見ている・・・。

「大臣は良い掘り出しモノをしてくれたな」

思いがけない言葉に頬が熱い。

ベルさんが手招きしてくれたのでテーブルにつくとお茶とお菓子を勧められた。

「歌も聴きたいよな、その喉は、一体どうしたんだ？変声期？」

王子はお茶しか手にしていないので、私もお茶だけにしておこう。

「怪我です」

指まで折られなかったのは、幸いだった。

「お医者さんには診てもらった？治るの？」

ベルさん、顔近いです。

「象牙の船と銀の櫂があれば治るでしょうね」

あのしみつたれが医者に連れて行くのは、余程稼ぐ見込みがなければまずありえない。

風邪をこじらせ、翌日には冷たくなっていた姿は忘れられない。

ああ、本当にいいお茶だ。

あの子にも、飲ませてあげたかった。

王子が一人になりたいというので、私達は部屋の外へ出た。

例によってアダンさんに引っ張られ、衣裳部屋へ向かう。

従者とは、王子の服を揃えたり、食事の手配や本人の要望を叶えたりする何でも屋、らしい。

お付の侍女みたいなものだろう。

もつすぐ収穫祭の時期なので、寒さに備えたものを用意するのを

手伝うのが、どうやら私の仕事らしい。

まあ、いい。

暖かな衣裳部屋で、衣裳係を呼んでみんなであれこれと物色する。王子には、暖色の服が必要だと力説したが、あいにくどれも暗い色合いばかりなので、後日仕立て屋を呼ぶ事で決着をつける。

ついでに王子の母、今は亡き女王の時代に居た吟遊詩人が使っていたという上等な服や羽根飾りのついた帽子、先の尖った靴などを見せてもらう。

どうやら随分体格のいい人物だったらしく、アダンさんが着ても横幅が余るので仕立て直して貰える事になった。

つまり、しばらくは用意してもらった小姓用の服のままだ。

貴人に仕える小姓の服だから、仕立ては良いし実用的なので私はこのままでも構わないのだが。

そう言うと、アダンさんは口をへの字にした。

「もうすぐ色々な所からお偉いさんが集まってくるだろ？その時に、小姓が楽器持つてうろついてたらサボってるように見えるだろうが」

確かに。

私が納得していると、衣裳係が不満そうな表情になった。

「個人的には可愛いからこのままで全然構いませんけど！てゆうか！ここやっぱり潤い足りません。なんとかして下さいアダンさんっ」

たくさんのお衣裳を抱えた女中達がいつせいに頷く。

「王子に小姓とか見習い従者を仕えさせるように伝えて下さいよ。」

騎士見習いはみんな巡回訓練行ってるし、つまんないです」

「巡回訓練？」

朝方見た騎馬隊の事だろうか？

余程不思議そうな顔でもしてたのか、女中達が競って教えてくれたところによると

始まったのは三代ほど前の女王の頃、元々山岳部族の寄せ集めであるこの国は、帝国が戦をする際には兵士を召集し出兵するのだが、山々に散らばり集落単位で生活する人々から召集するのは、困難な事だった。

何故なら遊牧をする部族あり、占いによって住む地を変更する部族ありで、同じ場所に留まっている可能性が低く、山を降りてこなければ知らせひとつも届かない。

それだけではなく、疫病が流行し集落どころか部族ごと全滅しても、誰も気がつかないという事もありえた。

それらを防ぐ為、騎士複数、医者に教師、ついでに商人が小隊を作り、定期的に各集落を巡回し知らせを持って行っているそうだ。

教師が居るのは、部族ごとに言語が異なるため共通語として帝国語を使っているのだが、帝国語が出来れば出兵しても生存率が上がる為らしい。

例えば、部隊はおおむね出身国ことになるが、戦場ではぐれた場合、言葉が通じない辺境部族兵の帰還はほぼ絶望的だ。

最悪、帝国領土内で敵兵として殺されかねない。

「医者もそりゃ帝国帰りつてワケじゃないけど、産婆が居ないような小さい集落には十分だからな」

そして騎士が居れば、危険な獣や山賊に対する行動が取れる。

「女王様凄いですね」

素直に感嘆すると、私以外全員が一斉に誇らしげな表情になった。

「ウチの王様達は凄いんだよ。ちゃんと俺達の事考えてくれてるし、帝国の奴等みたいに嫌味じゃないしな」

アダンさんも兵役の一環で帝国へ行った事があるそうだ。

確かに帝国は身分制度が厳しく、このように大らかな人々には居心地が悪かったのだろう。

歓談していると、女中頭にサボるなど怒られ衣裳部屋を追い出された。

事実なので平に謝る。

アダンさんとふらふらと歩いていると、暇なら手伝えと言われ調理室で芋の皮を剥く事になりかけたが、指を怪我したら困ると言うのと銀食器を磨く事となった。

これも従者の仕事に含まれるのかと訊ねると、そんな訳がないだろうと応えられた。

「王子が部屋に引き籠もってる限り、客は来ないし、俺の仕事なんかほとんど無いんだよ」

自嘲的な表情でそう言うと、スプーンを「ごしごしと磨く。

「呪いを掛けられたあとはみんなで色々試したんだ。魔法使いや賢者っていろいろを帝国から呼んだりして、けど全部無駄だった。乙女の口付けってのも試し・・・ベルの妹に小遣いやって頼にしてみただけだから、そんな眼で見るとよ」

私は息を吐いてフォークを手に取る。

磨き粉の臭いが鼻につく。

「そういえば、王子の呪いって解呪が失敗するたびに変わると噂では聞きましたが、本当はどうなんですか？」

あの服から浮き出る異様な細さを思い出しながら訊ねると、アダソンさんは複雑そうな表情になった。

「最初は、本当にバケモノの姿になったんだ。下半身だけな」

「半分だけ？」

痛々しいものを見る表情を浮かべ、手元のナイフを磨く力を込めている。

「その時は祝いの席だからって、大勢居たどっかの貴族とか領主とか国の使者とか、みんな悲鳴を上げて王子から逃げた。王子の婚約者は失神してたよ。」

そのあとすぐ、婚約は解消された。あの日は、あいつの誕生日だったのに」

悲しそうにそう言った。

「招待客の魔法使いが呪いを解く呪文を使ったら、今度は下半身が熊そっくりになって、司祭が祈りを捧げたら馬になった。」

魔女はそれを見て大笑いして正門から歩いて出て行った。一生忘れられないだろうな」

クラウディオ王子

夜半、食堂で演奏していると、険しい表情を浮かべたベルさんがやって来た。

王子に呼ばれているのだろうかと思っただが、そうではないらしい。

「王子の近くで、『三日ぐらいご飯食べてません』という顔してご飯食べてくれればいいから」

「さ、さっき晩御飯頂きましたが・・・」

予想外の言葉にどきまぎしていると、笑顔のまま両肩を掴まれる。

「『三日ぐらいご飯食べてません』という顔して、王子と一緒にご飯食べてくれればいいから」

ガクガクと頷くと、ベルさんはブーイングする聴衆を舌打ち一つで黙らせた。

「じゃあ、行きましょうか」

私はこの城に居る間、ベルさんには逆らわないようにしようと思っただ。

王子のメニューは病人食で品数は少ないが美味しそうだった。色彩鮮やかな粥に蒸し肉、食欲をそそる野菜スープ。

なぜか同じものが私にも供される。

訝しげな表情を浮かべる王子に、私はこう答えた。

「王子がこれからお食事だと伺ったので」

王子は気の無い様子で肉を少し口に運び、手を置こうとして私を見た。

いつ見ても狼のような瞳だ。

王子がスープを口にしたので私も少し頂く。

礼儀、らしい。

主人より多く食べてはいけないし、先に手をつけるのも良くないとか。

「美味しい。ここの料理人は本当に料理が上手ですね」

王子は複雑そうな表情で給仕に徹するアダンさんを見た。

アダンさんは無表情で王子を見返す。

王子が粥に手を出せば、私も肉を少し食べる。

空になった二人分の皿を片付けるアダンさんの後姿は、実に軽やかだった。

食事を終えて疲労した様子の王子に夜に相應しい曲を静かに演奏する。

二人だけというのも、少し気詰まりなものだ。

本来はベルさんやアダンさんが居るべきだが、二人も疲れているようなのでいざとなったら誰か呼ぶと約束したのだ。

「食事をするのが嫌いなんですか？」

王子は顔を上げ、短く息を吐いた。

「そういうわけではない。ただ」

呪われた半身を見つめる表情には諦めが混ざっている。

「肉を食べれば獣に近づくような気がするし、野菜を食べれば家畜になるような気がする」

私は納得し、指を止めた。

「私の知っている限り、食事によって呪いが進行したり変化するということはありません」

食事行為で呪われるという事はあったが。

「王子、私はこんな声ですから歌う事はできませんが、知識はあります」

王子は苦く笑ったが、私はそんな風に笑う姿を見るのは嫌だと思っただ。

なんとさえばいいのだろう。

沢山の歌や詩は知っているのに。

調理場から貰ってきた酒瓶をテーブルの上に置き、杯になみなみ

と注ぐ。

「王子、お酒を呑むのは人間と龍だけですから、大丈夫です」

自分用にもたっぷり注ぎ、一気に飲み干す。

酒場で歌っていた頃は、エールが代金代わりだったこともあったな。

もう一杯飲み干す。

いい感じに気分が高揚してきた。

頭の中の知識を総ざらいする。

「基本的には、呪いは口付けで解けます。他にもありますがかなり特殊ですので、多分違うはずですよ」

恐る恐るといった風に葡萄酒に口をつける王子に断言する。

「もしかして、お酒も久しぶりでしたか？」

頷く顔は、少し嬉しそうだ。

「無垢な乙女のキスは、駄目だったんですね。確か」

処女には、魔法に対する抵抗力があるといわれている。

一角獣が乙女にしか懐かないのは、彼らも魔法を拒絶する存在だから、という説が有力だ。

「あとは、身分のある人つまり王族ですが」

そもそも王族というのは、神の血筋を引くと言われ、王の手で触れられれば病が治るなどの説もある。

王による施しで病が快癒したという話は、真偽はともかくとして良くなる事だし。

そう言つと、王子は嫌そうな表情を浮かべた。

「叔母上と父ならもう試した。身分的には姫と王だ。それ以上は、もう確認できないだろう」

「もしかしたら、血族は範囲外かもしれませんが、あとは」

王子は天を仰ぎ嘆息する。

「みなまで言うな。それらに関しては、どう考えても無理だ」

王子も同じ事を考えたらしく、重い諦めが部屋に立ち込めた。

王子に他国の王子のキスを期待するのは、困難だろう。せめて王子が姫なら可能性はあっただろうが。

あとは、

「婚約者が居たとは伺いましたが・・・他には居なかつたんですか？」

今は憔悴して無残なものだけど、元々の造りは悪くないし性格だつて悪くない。

隣国では嫡子以外が多くて、大変なことになっているそうだから、王子にも相手がいないと言う事も無いのではないかと思う。

王子は何も言わずに杯を空けたので、王子と自分のお代りを注ぐ。

「婚約者は、宰相の娘だったか歳が一つ違いでな。大臣の息子とアダンの四人で幼い頃からいつも一緒だった」

悲鳴を上げて失神して婚約破棄した人か。

重すぎて何も言えず、黙って葡萄酒を味わう事に集中する。
ああ、鼻を突き抜ける清涼感。

コックが自慢するだけがある。さすがこの国の名産品だ。

「俺など、どうなるうが構わなかったのにな。半端に呪いが解けるからこのざまだ」

自嘲的な笑い。

「叔母上は、今どこにいらっしやるんですか？」

慌てて話題を変えようとしたが、王子の表情は更に荒んだ。

「どこだろうな。呪いを解く方法を探すといって出奔したきりだ。王位を継ぐのも、子供に王位を継がせるのも嫌らしい。確かに、何もなければあの人は自由に暮らせたはずだからな」

う、酒瓶が空になってしまった。仕方ないので次のを空け、王子にも勧める。

「えと、王様に新しいえーっと、お嫌でしょうけどあの側室といいますが、あの」

王様が居るなら、新しく世継ぎを作ってもらえばいいのではないだろうか。

王子の母である亡くなられてるお后様には、悪いが。

王子は酔いが回っているのか、ぼんやりと私を見つめ、ああと咳いた。

「そもそもこの国は、複数の部族で成立している。それらをまとめる事ができたのは初代女王で、彼女は恐るべき退魔の力を持ち合わせ、呪詛による疫病を尽く退け、紛争を続けていた各部族は女王を祭り上げる事で結束した」

王子は酔いと絶望で濁った黄色い眼を撫でた。

「代が経て退魔の力が薄れても、この特徴が続く限りは部族は今の協力関係を維持していくだろうが。それ以外の人間が王になれば、この国は終わる」

はつきりと言い切る。

「今、父が王位についてられるのは、叔母がまだ若いのと母の遺功だろう」

王子は自分で杯を満たし、一気に空けた。

「あの時に全身が蛙にでもなってしまうえば、叔母が継がざるをえなくなるし、父も要らない苦勞をせずにするだのに。薄れたとはいえ退魔の力によって半分しか呪いが効かないとはな。いつそ」

そんな顔をしないで欲しい。

私に出来る事は、何だろう、そう思いながら杯を重ね、夜が更けていく。

月がとても綺麗な晩だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8072y/>

呪われてる王子様

2011年11月29日23時52分発行